

同窓会ニュース

第2号

昭和61年2月1日

職業訓練大学校同窓会

〒229 神奈川県相模原市相原1960

訓大の近況

卒業生総数が2000名を越えました。その就職先も職業訓練校、企業、海外と多岐にわたり、同窓生間の意思疎通もままならない状況にあります。同窓会では、すこしでも会員諸兄に交流の場を提供しようと考え、昭和58年に第1号の同窓会ニュースを試みにお届けいたしました。いかががございましたでしょうか。あれから、もう2年余、その間に職業訓練をとりまく情勢は大きく変化しました。諸兄におかれてはセンタ・短大への移行、科の再編等の難題をかかえ、日夜真剣なとり組みをされていることと推察いたします。訓大でも、福祉工学科、情報工学科（仮称）の新設に見られますように、従来形のハード主体からソフトを主体とした教育・訓練体系に移行しつつあります。そのため各科においては科の将来性を展望しつつカリキュラム等の積極的な改革に取り組んでいるのが現状です。また、訓大における科の再成編の噂が一部に存在するのも事実です。

一方、再訓練、国際協力拡充の方向が打ち出され、再訓練では従来の長期・短期等の研修充実に加えて、短大教官の研究科コースが新設されました。また、研修生受け入れのための寮の

増改築も行なわれる予定になっていますので、卒業生諸兄が研修に来られた折には従来にもまして快適な寮生活が送れるものと思います。国際協力では、今までの集団研修コース（塗装科福祉工学科を除く科で実施している）、個別研修コースの充実とともに、4年制の長期課程に組み込む新たなコースを設け、より高度な実践的技能者の育成が検討されています。更には、国内にとどまらず、発展途上国応援のため訓大卒の優秀な人材が強く要求され、増々海外派遣が多くなるものと思われます。

前述の情報工学科については、現在の電気科電子科の中に含める電気系として、学生定員20名で昭和61年度より学生を募集することになっています。すでに、第1年度分として4名の教官も確保され、これからの訓大をリードする科として大きな期待が与えられているところです。（写真は現在建築中の情報工学科建物、昭和61年1月30日現在）



ヨーロッパの旅 同窓会

清水正男

卒業生諸君との約束を、女房の選択で去る3月下旬、ヨーロッパ・ツアー旅行参加という形で実行した。それについて同窓会から、近く発行される同窓会ニュースで報告せよ、との要請があったので、以下2、3の所見を書いて、報告かたがた御礼に代えたいと思う。

先づロンドンでの印象だが、郊外を走る車窓から見た風景に、ラグビーのボールの立つグラウンド、というより広場が何と多いことか、さすがは本場だと感心したが、更に強い関心を引いたのは、その芝生が青々としていたことである。それも北緯51度に位するこの土地である。冬には芝は枯れるものだと思い込んでいたわたしには、何とも不思議であった。専門家に聞いてみたいことである。

最初に気付いたのはマドリッドだったが、行く先々で、現地の日本人ガイドが観光客を免税店に案内する。そしてそこの店員の大部分が日本人である。わたしの見た限り、日本人観光客中でも女性客は、観光よりはむしろ買物が目的ではないかと思われ、わたしはその買物ぶりを見て、一種の恐怖感を覚えた。

今回の旅行先では、ローマが最悪だと思ったのは路上駐車である。2重駐車は愚か、3重駐車まで見られた。現地ガイド氏は、ヨーロッパでは普通のことだといひ、ヨーロッパ車は日本車と違って、バンパー本来の機能を付与しています。例えば、前後の詰った駐車中の車が出る時には、前後のバンパーにその目的を果させます。ご覧下さい。日本のようにピカピカの車は少ないでしょう。ヨーロッパ人はその置かれた条件に合わせた車を使います、と説明してくれた。

最後にモンブラン。シャモニーの町からローブウェイで、一気に標高3,842メートルのエミール、ドゥ・ミディ展望台に上りつめ、そこで指呼の間に見た白皚々(がいがい)たるアルプスの峰々。そして零下15度の寒さ。それは

正にこの旅行の圧巻であった。



高山病にかかれた奥様とアルプス

この紀行文は同窓の諸氏及び職員(OBを含む)の皆様から清水前学生部長に送られた退職記念によるものです。

「ご夫妻ヨーロッパ旅行招待」

各科近況報告……

機 械 系

機 械 科

去年から今年にかけ、科の再編成問題が具体的に取り上げられ、多くの議論がされましたが、結果として、この問題は先送りされた形になり、現在の機械科が当面続きそうです。しかし時代の流れもあり、訓大の組織、内容も、このままでよいということでもないと思われるので、遠からず、再び真剣に取り組むことになるでしょう。

今年は須田教授が定年退職され、鈴木講師が福祉工学科に移りました。結果として機械科から塩田助教授、武藤助手、鈴木講師の3人が福祉工学科へ異動したため、機械科のカリキュラムへの影響も少なくありません。

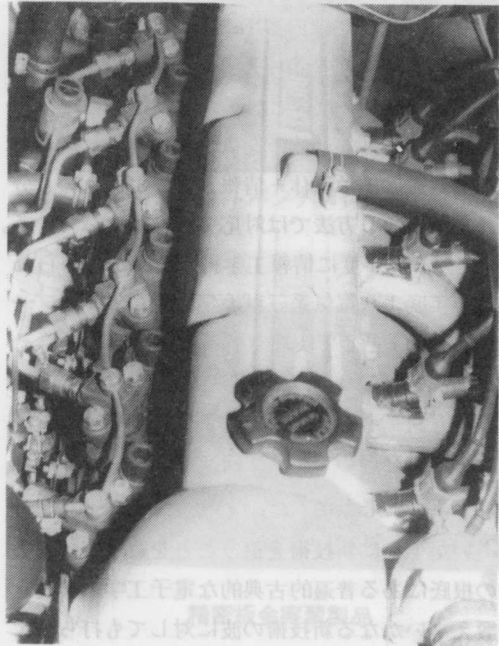
異動に伴う新任の先生としては4月より古川総訓から米山講師を迎え、また10月には東大生研より水野さんが講師で着任する予定になっています。下記に現在のスタッフを紹介しますが、小平からのスタッフは4名で、相模原以後のスタッフが10名となっています。職員がそれぞれ専門を持ち特徴ある機械科にすべく

運輸装置科

現在の運輸装置科のスタッフは広い範囲の研究分野で活躍しています。人-自動車系の研究は自動制御や安全工学、人間工学の領域で、また、内燃機関に関してはスーパーチャージャやEGR、ハイブリッド方式の新型エンジン(写真参照)の分野で研究が行われています。このほか熱工学(接触熱伝達)や機械要素(ラビリンズツール)の研究でも実績を上げています。今年の10月には機械力学のスタッフに加わる予定となっており、まさに一般大学の機械工学科に相当する顔ぶれです。学生のカリキュラムも交通機械に熱、流体を加えた3本柱がメインとなっています。

全員で努力しています。今年も2月末に卒業研究発表会に合わせて科同窓会を開きました。多数の参加者があり盛大に開催することができました。今後とも同窓生皆様の御協力をお願いします。

篠崎 襄	教授	精密加工	
大沢 水澄	〃	機械力学	
水野 万亀雄	〃	表面工学	
池辺 洋	〃	自動制御	
宮崎 俊行	〃	微細加工	科主任
広田 平一	助教授	数値制御	(2期)
海野 邦昭	〃	精密加工	(4期)
佐藤 晃平	〃	工作機械	(6期)
東江 真一	講師	精密加工	(9期)
米山 実	〃	機械加工	
磯野 宏秋	〃	機械要素	(11期)
水野 毅	〃	自動制御	
和田 正毅	助手	表面工学	(13期)
坂井 儀道	〃	機械加工	(15期)



ディーゼル燃料とガソリンの噴射弁をもつハイブリッドエンジン外観

電 気 科

主に電気工事関係の実習を担当されていました助教授の羽柴 薫先生は昭和60年3月をもって定年退職されました。現在、電気科は教授として大和先生（科主任）、小田先生（図書館長兼務）、見城先生、助教授として中野先生、佐藤先生、市川先生、講師として高橋先生、荒先生、助手として渡辺先生の9名のスタッフで運営されています。

電気科では昭和61年度より電気系に新設される情報工学科の開設にともないカリキュラムの全面的な改正作業が行われています。電気科では電力工学、電設工学を主体としたカリキュラム構成で科としての特色づけを行っています。

また、最近の新しい技術を積極的に授業に取り入れていくよう最新の設備を導入し実験、実習を行っています。ここ2年間に導入された設

備は、

- (1) ソフトウェア開発支援装置
- (2) ハードウェア開発支援装置
- (3) FFTアナライザ
- (4) マイクロプロセッサ教育訓練装置
- (5) トランスベクトル制御装置（誘導機）
- (6) 無接点シーケンス制御装置
- (7) 無整流子電動機制御装置

等があります。



最新機器を使用した学生実験風景

電 子 科

訓大の電子科は開校当初、無線通信技術を中心とする教育訓練内容であったが、技術革新に伴い半導体関連技術、そして電子計算機を頂点とするデジタル技術と情報処理技術へというふうの内容を付加し分野を広げてきた。しかし、”無線通信+半導体+情報・・・”という分野を付加する方法では対応できなくなっている。また、59年度に情報工学科の新設が認められ61年度より電気系三科（学生定員60名/一科20名）として実施されることになった。そこで、これらのこのことを踏まえて59年度より電子科のカリキュラムのありかたについて科内で検討を進めており、ほぼカリキュラム内容の方針が出来上がった。

いたずらに新技術を追うことを避けて、技術の根底にある普遍的古典的な電子工学の素養を鍛え、いかなる新技術の波に対しても打ち勝てる技術者、並びに実技能力を高めた実践的技術

者を作ることに主眼を置いた。この理念にもとずいて、電子科の専門カリキュラムは、(1)専門基礎、(2)専門共通、(3)専門の三段階構成とする。

今、この方針に従って科目の設定や時間割などの具体的な作業を進めています。一年次（61年度）に関しては、電気系三科の合意が得られ実施されることになっています。しかし、二年次以降に関しては大幅な変更になるため、具体的なカリキュラムの実施は今後の課題です。

（文責 八田）

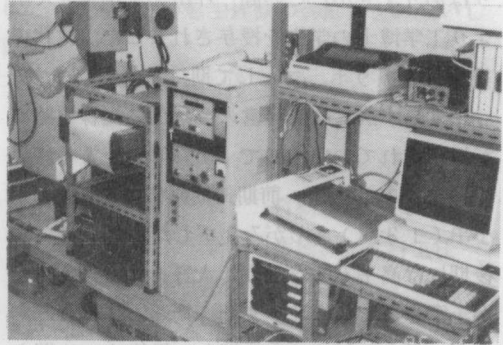
溶 接 科

現在、溶接科教官数は12名ですが、今年限りで宮入教授、岡野、筒井両助教授が退官されます。思えば宮入教授には鉄道技術研究所時代の豊富な研究経験を生かしていただき、研究、輪講の指導、アドバイスなどで文字どおり科のブレインとして活躍していただいた。残り後わずかであるが来年3月去られるのが誠に惜しく思われます。

岡野、筒井両助教授には主として実技を中心として科の発展に寄与していただいた。共に科の発展段階から大変困難な時期に大いに頑張っていたいただき、その労に対して大変感謝しています。

写真は科に新らしく導入された装置で、溶

接残留応力の評価や各種表面加工による残留応力の測定用として実験、研究に利用されています。最近、パソコンによる制御機能が付加され複雑な測定やデータ処理が可能になりました。



X線回折応力測定装置

塑性加工科

最近の塑性加工科では、人の面やカリキュラムの内容も大きく変わりつつあります。

人事移動に関しては

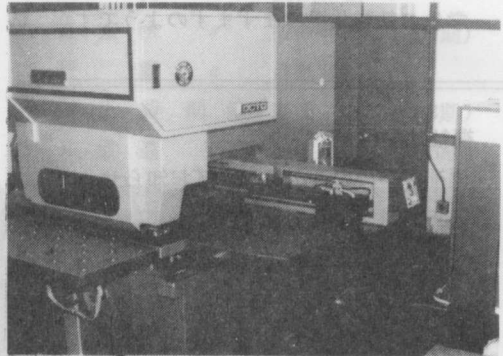
昭和59年3月 訓大創立以来、塑性加工科の発展に尽力されてこられた助教授の土山淳二先生が退官されました。

昭和59年4月 都立大で勉強されていた、訓大18期生の森茂樹先生を助手としてお迎えしました。

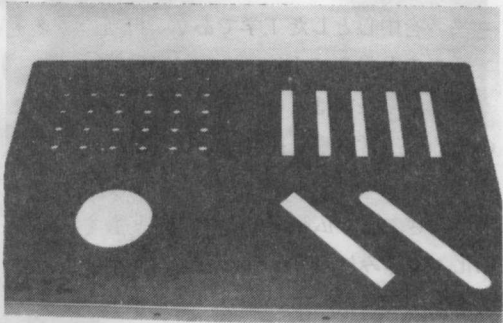
昭和60年3月 鍛造科、金属材料科、塑性加工科と各科の発展に尽力されてこられた助教授の大村幸一先生が退官されました。

土山先生、大村先生には、現在、塑性加工科の非常勤講師をお願いしております。

カリキュラムの内容では特に、今年からタレットパンチプレスを使用した精密板金実習が行なわれております。科の卒学生も25名前後と多く、21期生で196名となりました。科の卒業生の住所録をパソコンに入力しましたので利用の方は連絡下さい。



タレットパンチプレス



精密板金実習製品

塗 装 科

昨年3月、植木先生が定年退職されて以来11名のスタッフで頑張っています。植木先生も週1回出講されていますし、コンパなどには必ず出席いただいていますので、従来とあまり変わりはありません。この間、坪田先生が東京大学より工学博士の学位を授与されました。次代の塗装科を担うホープとして期待されています。

相変わらず訓大は、経営の多角化、複線化路線が採用されていますので、研修等で卒業生諸兄の往来があります。前期長期研修に上杉(7期)小串(13期)さんがみえました。

後期には高平(12期)、大野(16期)さんが予定されています。また、衛藤(1期)、阿部(4期)、杉山(12期)、伊達(16期)さんが短期研修でなつかしい顔をみせてくれました。

学生の就職状況はまざまざのようですが、情

報等をお寄せ下さい。また、工場実習、実務実習などでも卒業生諸兄のお世話になります。今後共、よろしく願いいたします。



21期生、卒業パーティ

福祉工学科

福祉工学科の近況についてお知らせします。

昨年5月末、建物(4号館および第4実習棟)が完成し、やっと科としての体裁が整ってきました。現在の学生数は、1年生15名、2年生24名、3年生26名です。

専門科目の主な内容は、医学リハビリテーション、職業リハビリテーションおよびメカトロニクスを中心とした工学であり、担当のスタッフは表のとおりです。

福祉工学科では、ハンディキャップを持つ人のために工学技術を役立てること、およびその分野で働く人材の育成を目的としているため、学ぶべきことが広範囲にわたり、ともしれば、消化不良ぎみになりそうな面もありますが、学生も先生も頑張っています。まだ、卒業生はいませんが、昭和62年3月には第1期生が卒業し、先輩諸氏に何かとお世話になると思いますが、よろしく願いいたします。

分野	教授	助教授	講師	助手
医リハ	本多		七尾	
職リハ	道脇	松井		
工 学	古野	塩田 関口	磯村 鈴木	武藤



建築科

開発途上国に対する国際協力の一環として、職訓大が大きな役割りを果していることは、同窓生諸君も御承知の通りである。

建築科においては、長期指導員訓練（4年）課程に中国からの留学生を受入れ、昭和58年度に2名（単 霽翔君、 奚 自堅君）、昭和59年度に1名（張 冠華君）が巣立って行きました。また、昭和57年度には、釜山開成大学建築工学科の黄 賛奎氏を、研究生としてお迎えしました。

これらの方々は、帰国後、それぞれの国において指導的な立場に着き、活躍しておられます。

さらに、昨年、試行的に行なった国際協力部集団コース（1年間）が、昭和60年度から正式なコースとして独立してスタートしました。この課程は1963年に開設され、先行科においては20年を超える歴史を持っております。建築科については、研修生からの強い希望があって、遅まきながらの新設となりました。

木材加工科

当科は小平時代以来、主として家具産業を柱に据えたカリキュラムと人員構成でやって参りましたが、あらゆる意味で今大きな曲り角に直面しております。現にこの近年における新卒者の就職状況からもこの傾向は顕著であり、傍系職種への進出が目立ちます。いきおい守備範囲の広いエンジニアが社会的に要求されているにもかかわらず、これらに対応した教育・訓練が十分でないというのが現状です。目下スタッフはカリキュラムの見直しをはじめとした諸問題の解決に鋭意努力しております。また、世の中コンピュータ時代と言われて久しくなりましたが、当科の教育・訓練にもこれらの積極的な導入によって従来型の教育・訓練から脱皮すべき部分がかかなりあるように思います。更に、卒業生と科はいつも連絡を密にし、時には喝を入れていただき、科のあるき姿を構築したいと考え

これまでは、国による建築様式の違いや建築生産技術の相違などによって、基本的に相容れない部分があるとされて来ましたが、近年では住宅問題や都市再開発などを中心に、我が国との接点が拡大されつつあります。

この背景には、建築構法・建築生産技術の国際化傾向が進行していること、我が国の建築技術水準が世界をリードする所までレベルアップして来たこと、などがあると考えられます。

我々11名の建築科スタッフは、彼等の期待に応えるべく、体制づくりが当面の課題となっています。

この集団コースについては、将来は、4年間の大学課程の中に組み入れて、より高度な教育訓練を目差そうと、労働省・外務省・職訓大の3者で検討中であります。（谷起）

※ 今年から、同志会建築科関係の連絡等について、浅井清美さん（5期生）にもお手氏してもらっています。

ている昨今です。スタッフ一同健康です。

新設の建築工学科については、現在の建築科電子科の中にも含める電機系として、学生定員20名で昭和61年度より学生を受け入れることになっています。すでに、第1年度分として1名の募集も確保され、これからの拡大をリードする科として大きな期待が寄せられているところです。（学員は現在建築中の情報工学科建物、昭和61年1月30日現在）

同窓会連絡

☆同窓会名簿の整備についてのお願い

会員数の増加に伴い、会員名簿の正確な整理が難しくなってきました。名簿は、各科代表者に御協力いただき、科ごとに整備してきております。しかしながら、転勤、転職、結婚等に伴う住所及び勤務先等の変更がひんばんにあり、その把握で苦勞しております。

そのニュースが無事に御手元に届く会員の皆さんにおいては問題がないのですが、今後、変更がありましたらその都度、同窓会あるいは各科代表者宛ハガキで御一報下さい。各科代表者は下記の方々をお願いしております。御協力を願います。

機 械 科	広田平一
運輸装置科	永田雅美
塑性加工科	大谷 昇
溶 接 科	西田隆法
金属材料科	若林俊治
電 気 科	中野弘伸
電 子 科	八田昌之
建 築 科	谷 卓郎
木材加工科	吉松孝夫
塗 装 科	久下靖征

☆会費納入についてのお願い

本会の運営は、終身会費として納入していただく8,000円の会費でまかなわれております。現状では、通信連絡費・印刷費などの増加により、会をスムーズに運営していく事が非常に困難な状態となっています。会費未納の皆様は、下記の口座番号、加入者名に郵便局より振替用紙を御利用の上至急会費の払い込みをお願いいたします。なお、裏面の通信欄には、卒業年度・科・払込金額・近況報告等の御記入をお願いします。

口座番号 東京45350

加入者名 職業訓練大学校同窓会

☆訓大職員の退職について

訓大及び訓大卒業生に対して、ひとかたならぬ御尽力を下さった次の先生方が今春3月末をもって退職されますので御連絡致します。

溶接科 宮入宮人教授

筒井年男助教授

岡野寅夫助教授

塗装科 仁木栄治教授

☆編集部より

同窓会ニュース第2号の発行が遅れたことをお詫びいたします。今後とも、会誌や名簿の発行されない年度に本ニュースを継続して発行していくつもりでおりますのでよろしくお願いいたします。